第6室

染織—様々な技法の染織品—

染織は「繡仏裂」を中心として、飛鳥時代から室町時代まで、ひろく献納宝物に伝えられる染織品のさまざまな技法を概観します。法隆寺は飛鳥時代に創建され、現在もなお広大な伽藍を誇る生きた寺院です。そのため、各時代の作品が伝えられているところに法隆寺の宝物の特徴があり、それは染織作品にもあてはまります。展示機会の少ない中世の作品もふくめ、法隆寺に伝えられた染織作品の世界を技法に着目しながら概観します。

N-32-2,5,7：繡仏裂（しゅうぶつぎれ）

細い帯状の絹裂に、天衣を頭上に大きくひるがえす天人を表わした作品。刺繡の糸は、強く撚った糸を用いた継ぎ針繡（つぎばりぬい）という技法で、文様の輪郭を縁取り、内部を細かく埋めています。継ぎ針繡は、文様が表裏同じように現れる非常に精巧な両面刺繡です。

N-45-2：縹地連珠襷花文錦裂（はなだじれんじゅたすきかもんきんぎれ）

古墳から飛鳥・奈良時代はじめ頃の日本の錦は、数色の経（たて）糸の浮き沈みで文様を表した経錦が中心でした。この作品も経錦の遺品であり、連珠風の襷のなかに意匠化された花文をおさめています。

N-46-2：茶地獅嚙白象文錦裂（ちゃじしがみはくぞううもんきんぎれ）

経錦の断片。獅嚙文（しがみもん）の両側に火焰宝珠（かえんほうじゅ）と象を配する。象は胴に斑紋（はんもん）を表わし、背には火焰様の飾りを付けた特異な姿で表現されています。

N-46-5：濃茶地朽木形文広東裂（こいちゃじくちきがたもんかんとんぎれ）

広東裂とは、あらかじめ経糸を文様に応じて染め分けてから平織に織った縦緋の織物。法隆寺の幡などに多く用いられていますが、正倉院の染織品にはほとんど例をみません。使用時期が限られており、インドや西アジアなどからの技術に基づき、中国または朝鮮において制作された可能性が考えられます。

N-46-3-1：赤地山菱文錦裂（あかじやまびしもんきんぎれ）

飛鳥時代の錦は経錦が中心であったが、緯（ぬき）糸を任意に浮かせた浮文錦（うきもんにしき）も一部織られていました。この錦は浮文錦で、菱文や山道（やまみち）文などの小さな幾何学文を連続して表しています。

N-44：紫地円花文錦包裂（むらさきじえんかもんきんつつみぎれ）

聖徳太子が用いたと伝えられる「夏御衾（なつのおんふすま）」（現在は大破した状態で保管）の包裂（つつみぎれ）として伝えられた作品です。錦は赤地に紫、黄、緑、白の色系で、菊文や唐草花文等を配し、二幅仕立てとなっています。

N-46-6：紅地菊桐文綿裂（べにじきくきりもんきんぎれ）

色焼けの状態から本来は二幅仕立ての包裂として用いられたと考えられます。赤地に白、緑、黄の色系で菊文と桐文を交互に配しており、室町時代頃の典型的な文様構成を見ることができます。

N-53：竜鬢筵（りゅうびんむしろ）

四角形をした藺筵（いむしろ）で、縁には錦をめぐらしています。筵の部分は染めた藺草によって文様を表していて、今日の花莫蔭（はなござ）と同様です。なお、奈良斑鳩の法輪寺には七世紀に遡る龍鬢褥（重要文化財、伝・推古天皇御料）が伝えられています。